

何ごとおはしますをば知らねども

土田龍太郎

そも伊勢大神宮にて佛法を忌むは古へよりの掟なれども、そのゆゑよしのはるけくすきことよなし。神と佛ともとより同體にて、内宮は胎藏界、外宮は金剛界なりといへれど、いづれの世にかありけむ、天照大神と第六天魔王と御契約ありて、御垣の内にては三寶の名だにも聞かじ。わが身にも近づけじとのたまひて、外には沙門を忌みつつ、内には佛法を護りたること、西行物語また神道集のたぐひに記せれど、このことまことはいかがなりや、いみじくくすしきわざにて、なべてのものえ窺ひ知るさかひにてはあるまじければ、問はでやみなむにはしかじかし。

西行もとより僧形の身なれば、伊勢に詣でしとき、御寶前に至るは許されざりしなりけり。西行物語には、

御裳濯川のほとり杉の群立ちの中に分け入り、一の鳥居の御前にさぶらひて遙に御殿を拜み奉りき。

とぞ記されたる。

世下りて貞享元年、西行の跡を慕ひてやまざりし芭蕉庵桃青の伊勢に詣でしをり、その形、僧にもあらず俗にもあざりしかども、まちかには神拜をえとげざりしさま、野ざらし紀行に左のごとくに述べたり。

僧に似て塵あり、俗に似て髪なし。我僧にあらずといへども、もとどりなきものは浮屠の屬にたぐへて神前に入るを許さず。

いつとは定めがたけれど、伊勢參宮のをり西行法師詠みけるとて今に傳はりぬる

何事のおはしますをば知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

といへる一首、世に弘く知られたり。さはれこの歌、山家集の内には見えず、異本山家集なる西行法師家集にのみ入たり。この集の筆寫本にはこの歌を收むるもあり、收めざるもありてさまざまなれば、この一首はたして西行みづからこれを詠みたりしやいなや確かならず。和歌につきてもこの學びする今のかしこき人々、おほかたこの歌の眞偽を定めかねたるにてもやあらむ。わが手元の西行全歌集といへる刊本には、末にこの歌をも載せたれども、校訂者、脚註に存疑と標したり。

西行の歌の躰一とほりならねども、をりにふれそぞろに迫りくる思ひにかられて、さまざま巧まず、ほしきままに詠み出でけむ歌少からで、いかにぞや里びて聞ゆるものさへうちまじれり。何事のおはしますをば一首もまた、ただあからさまにうち見るほどは、かか

るほしきまなる西行自詠のたぐひにもおぼゆるめども、その調べなにとやらむ平俗にて丈高からねば、まこと圓位法師の作なりやいなやいと疑はし。眞偽をしかと定めむにつひの據りどころとはなけれども、名も知らぬえせものうはべばかり西行詠草に似せてものせるこしをれのまぎれ入りぬるにてもあるめれば、かの法師の風雅の跡を慕ひ尋ねむともがらのあながちにあつかはずとも苦しかるまじとぞおぼゆるなる。

(令和四年九月二十六日受附)